

続小宮山木工進昌世年譜稿

鈴木 淳

要 旨 本稿は、前稿を引継いで、好古の学芸家謙亭小宮山昌世の後半生すなわち代官罷免後から死没までを年譜形式で考察したもの。その間、師太宰春台と交際を深め、賀茂真淵の弟子でもあった河津長夫の碑銘を撰し、関鳳岡門下の『篆書唐詩選』の刊行のために周旋、さらには自著『発蒙書東式』を出版するなど、漢学に傾注した。またその前後、甲斐の加賀美光章に慕われ、その文庫設立に助力、ついで『名賢和歌秘説』など歌書の繕写に親んだ頃には、後の山手連の狂歌師山手白人との交際も推知される。晩年は居を小石川隆慶橋畔に卜して、昌世の真骨頂とも言うべき雑史『菴溪小説』を編み、さらにその別巻として、英一蝶らの流刑事件に生々しく迫った『民蝶半記事伝』を共謀の仏師民部からの聞書としてまとめるが、当該書は山東京山の『英一蝶流謫考』による紹介を経て、今日まで一蝶伝の第一級資料としての価値を失わない。

○享保二十一年丙辰（一七三六）正月、太宰春台、閉門中の昌世に書簡を認めて激励する。

『春台先生紫芝園稿』（宝暦二年二月序刊）後稿卷一四には「復小宮山君延書」と題するやや長文の書簡一通が収められる。不遇の昌世に対し、閉門幽居中の今が学問に没頭して自己を広める絶好の機会であるとし、詞を尽くして勉励したもので、後進を氣遣う春台の師情溢れる書簡である。左にその全文を、私に返り点を付して掲出する。⁽¹⁾

復小宮山君延書

純曰。長翁致_二足下人日書_一。開封。墨痕淋漓。宛若_レ見_レ面。承_レ賀_二歲首_一。且審_二貴第平安_一。太孺人康寧。欣慰何限。足下被_レ謫杜_レ門。不_レ得_二出入_一。既已_二十旬_一。鬱悶可_レ想也。然純竊謂_二君延_一特不_レ得_二出行_一如_二齋居_一耳。比_レ之拘_二於囹圄_一。放_二於遠方_一者。豈同年之論哉。古人有_二下帷講誦三年不_レ窺_レ園者_一。君延雅好_二讀書_一。尚可_二以自広_一矣。向者純進_二覽徂來先生所_レ著弁道_一編_一。尋又進_二純所_レ著斥非_一編_一。今足下論_レ以_二三書_一皆卒業。因自言_レ其所_レ得_二於徂來之道_一云云上以致_レ謝。夫謝。吾不_レ敢_レ當。若_二足下之言_一。豈不_レ然哉。蓋徂來之道。即孔子之道。非_二孟荀諸子之道_一也。孔子之道。即二帝三王之道也。二帝三王之道。存_二乎六經_一。微_二六經_一。無_レ以_レ見_二二帝三王之道_一矣。論語孝經。則斯道之奧義。聖人之口訣也。故讀_二論語孝經_一。然後知_二孔子之道_一。即二帝三王之道。讀_二六經_一。然後知_二二帝三王之道_一。得_二孔子而有_三以伝_二於今_一也。近時仁齋先生尊_二論語_一。以為_二最上至極宇宙第一書_一。遂廢_二六經_一而不_レ講。夫六經。事也。又法也。故或謂_二之六藝_一。論語。其義也。故有_二六經_一然後有_二論語_一。論語雖_レ尊。豈可_レ得_レ廢_二六經_一而獨尊_二於宇宙_一哉。此其謬可_レ見也。古人有_二晚學而能進_二於道_一者_上。今足下年纔四十余。既通_二大義_一。不_レ可_レ謂_レ晚矣。且足下所_三以獲_二罪_一於朝廷_一者。忤_二官長_一也。所_三以忤_二官長_一者。愛_レ民也。足下雖_レ

見^二廢紂^一。特失^レ官耳。婦人^二羽林軍^一。而食^レ禄如^レ故。是則 國家洪恩。祖考余福也。當^二是時^一。足下誠宜惟^二其所^一以自效^一。來書云云。則知^二足下之志^一。如^二純所^一望。是可^レ尚也。夫鉛刀猶能^一一割。況足下素^二懷利器^一。未^二甚試^レ之。純愚竊惜^レ之。為^二足下一計者。莫^レ若^二夙夜砥厲以益利^一其鋒刃^一。然後盛^二以錦囊^一。貯^二以玉函^一。藏^二諸秘府^一。不^レ敢^二妄用^一。待^二夫盤根錯節^一而後一試^二其能^一。雖^レ然。遇不^レ遇時也。有^レ命焉。不^レ可^レ必也。易曰。雲上^二於天^一。需。君子以^二飲食宴樂^一。言^二以^レ不^レ待待^レ之也。是故。君子苟不^レ遭^レ遇。莫^レ若^レ樂^レ道。樂^レ道者。読^レ書為^レ文是已。足下雅好^二著述^一。吾知^二其足^一以自娛^一。惟足下自愛。所^レ示詩若文。点檢復上。歲初多事。不^レ暇^レ作^レ書。有^レ似^二怠慢^一。惟足下恕察。不備。

書中に「足下被^レ謫杜^レ門。不^レ得^二出入^一。既已^二十旬^一。」と、昌世が閉門を命じられてすでに百ヶ日を過ぎたことが記されるので、享保二十一年正月の書簡と推定されよう。書簡は、まず乾長翁に託された正月七日の墨痕淋漓たる昌世書簡を見たことを述べ、謫居の鬱悶に同情しながらも、出行不如意の齋居は、獄舎に繋がれたり、遠方に流されたりといった境遇とは異なるとし、三年間帷を下ろして講誦に耽った古人の例を引合いに、自己を研磨する機会であると言つて激励する。また先に進呈した徂徠の『弁道』と自著の『斥非』について、すでに昌世が卒業したことを言いつつ、その理解が未熟であることを指摘し、「徂來之道」は「孟荀諸子之道」とは異なり、あくまで「孔子之道」すなわち「二帝三王之道」であること、かつそれが「六經」に具わることなど、噛み砕いて徂徠の『弁道』にいわゆる「先王之道」を力説する。おそらく昌世の理解は、六經と四書五經、孔子と孟子の間に寸毫も差異がないとする、従来の朱子学に近いものであったに違いない。春台はさらに、『論語』や『孝經』を「斯道之奥義。聖人之口訣」と称え、それらを読むことによつて「孔子之道」を知りうるものの、「二帝三王之道」を知るためには、あくまで六經を読むべきであるとし、近時、伊藤仁斎が出て『論語』を「最上至

極宇宙第一書」と絶賛することによって、ついに六経の講読を廢するに至つたと糾弾する。

また春台は、晩学にして功を成した古人を例に取り、昌世がまだ四十代ながらすでに道の大義に通じていること、また罪を得たことは愛民の情のしからしめたところで、しかも旧のごとく幕臣として食祿を得ていることなどに触れ、国家の洪恩、先祖の余福を想うべきことを言う。さらに、まさにこの時機に当たつて、夙夜祗厲して自らの才学に磨きをかけ、盤根錯節を待つて読書、詩文を楽しむよう勉々と論じている。

春台については今さら賢言を要すまい。荻生徂徠の高足として、服部南郭と双璧をなし、南郭の詩文に対し、春台は経学に優れた業績を上げたことで知られる。名純、字徳夫、通称弥右衛門で、延享四年五月三十日、六十八歳で没した。昌世が春台に入門した時期は、右の書面によれば、その徂徠学に対する理解がいかにも浅薄であることから、享保二十年中の事として大過ないように思われる。いかに早くとも、代官を罷免された享保十九年七月を遡ることはあるまい。昌世と春台との直接の関わりを示す資料としては、右掲の「復小宮山君延書」に続けて、「与君延書」「又」と題する短簡二通が「春台先生紫芝園稿」巻一四に収められる。そのうち後者は、

大前日蒙_レ寵召_二到_二貴府_一。不_レ想足下延_レ僕令_レ得_レ拜_二太孺人於内堂_一。見_レ遇以_二親狎之意_一。鄙心無_レ任_二感激_一。昨日敝廬之会。足下有_二貴幹_一不_レ見_二貴臨_一。惋惜無量。淫雨暫晴。伏惟_二太孺人興居佳勝_一。多多

拜上。余情不_レ既。純再拜

(2) といふものである。すなわち、春台は、先に昌世邸で歓待を受けたことへの礼と、前日の春台自宅での会に昌世が不参であつたことに惋惜の意を表わし、翌日、天候の回復を待つて改めて招待したもので、両者の親密な交情を窺うべき一通である。また、同じく「春台先生紫芝園稿」後稿巻二には、

謙亭主人邀_二大泉水大夫_一陪宴作_レ此

高二會華堂二陳二八珍一。清談永日遠二風塵一。大夫為レ客堪二沈醉一。驅二逐余寒一滿座春。

君延宅与二子允一飲卒レ賦

二難并得古來難。案上圖書相對看。不レ是主君能置レ酒。故人那尽二十年歡一。

(3) 七絶二首が収められる。「大泉水大夫」は出羽庄内藩家老の水野華陰のこと、「子允」は松崎觀瀾の字であり、昌世は自邸で、春台に彼等を交えて、しばしば詩会を開き饗席を設けていたのである。とりわけ後者からは昌世がよく酒を以て客を遇したことが知られるが、湯淺常山の「文会雜記」卷之一下に、「君延ハ酒キラヒ、曲江ハ酒ズキ也。春台、曲江ノ処ニテハ酒ヲノマズ。君延ヲミテハ数盃ヲカタムケ呑マル、ト也」(4)とあるのと相照らし見ると面白い。「文会雜記」には又次のような記事も見える。(5)

一、寿門松ノ文章ハ、小宮山奎之進士(下)書レテ、李江晋ト作者ノ名ヲセラレタリ。李ノ字ノ中ニ木ノ字アリ。江ノ字ノ中ニ工ノ字アリ。晋ハ進ノ声ヲカリタリ。甚器用ノ人ナリ。故アリテ春台ハ交ヲタ、レタルトナリ。「寿門松」は未詳ながら、昌世が唐人風の名李江晋を戲称して草したもので、あるいは狂文などようなものか。また義絶の理由も不明であるが、昌世のこれまでの行跡からすれば、原因は彼此想像できそうである。

昌世の詩については、今のところ一篇も管見に入らない。先掲の春台書簡には、昌世が詩若干を春台に示した由が記されるが、春台自身、後年詩作を廃したこともあつてか、昌世もほとんど詩賦を遺さなかつたものと思われる。甲斐国に関わる百数十人の詩人の伝記と作品を蒐めた前嶋敬父著「峡中詩藪」なる書にも、その例言に「小宮山県令僧寂通呉雪等雖レ知有レ詩乎、無レ由レ得二遺編一者、姑俟二他日之搜索一」(6)と、その遺作を求めても得られなかつた類とする。

○寛保三年癸亥(一七四三—五十五歲)十二月十七日、駿府城代の支配下に置かれ、のち小普請奉行の支配となる。

『断家譜』に、

寛保三年癸亥十二月十七日駿府御代官、其後小普請松平頼母支配時宝暦九年己卯八月二日隱居

とあるが、駿府代官とは同城代のことであろう。『柳営補任』や『寛保武鑑』によれば、当時の駿府城代は松平

豊前守康郷で『寛政重修諸家譜』卷五二の当該条に、「元文四年九月六日駿府の城代となる。宝暦元年三月二十

五日西城の御側にうつる。」とある。⁽⁸⁾ また、松平頼母は、大給松平氏近明のことで、やはり『寛政重修諸家譜』

卷一四の当該条に、「(宝暦)六年二月十一日小普請組の支配となり、明和四年七月四日西城御小性組の番頭に転

じ、十二月十六日従五位下伯耆守に叙任す」とある。⁽⁹⁾ よって昌世は、小普請支配の土屋利記について、寛保三年

から駿府城代松平康郷の支配を受け、隠居した宝暦九年には小普請支配の松平近明の配下にあったことになる。

○延享四年丁卯（^{五十四}_{五十九}）十一月、河津長夫の墓碑銘を草する。

河津長夫は、加藤宇万伎の叔父に当たり、春台および真淵の高足であるが、その碑文は昌世の選文になることが、国会図書館蔵の『麓廼塵』⁽¹⁰⁾卷四に収められる「文卿河津君墓碣銘」によつて知られる。同碑文は、すでに丸

山季夫氏の「加藤宇万伎」に紹介されるが、あらためて今、返り点を付し左に再録することとする。

君諱祐章、字文卿、一字長夫、蓮蒿廬其号也、氏河津、其先建久之朝関東之貴族也、父祐篤、母小泉氏、

以享保十四年己亥七月五日生東都湯島、父及兄祐之渥美侯帳下士也、享保二十年乙卯君以父兄蔭亦

仕于侯入給事、年十七、兄祐之卒、以君為其嗣、侯命使襲其祿、任行人職兼長侍衛通中外之

事、最為要職、君天性孝友、在職謹慎、為學善文、業春台先生、又善和歌、不_レ好_二近体_一

以古道自持焉、從賀茂真淵深得其旨、真淵告我輩曰、文卿於此道已昇堂矣、庶幾入於

室也、同僚伊藤郡翁有子、曰祐世、与君結交如親兄弟、今年春二月君罹微疾、逾月不_レ愈、

至冬十月「謂二祐世一曰、吾疾已レ病、無レ嗣、養レ汝為レ後、先私謀二於吾双親及汝父兄一、已所レ許矣、事在レ危莫レ辭、乃請二侯命一、侯即准レ之、是召二家人及知故一、為二永訣一、容色自若、戒二祐世一曰、忠孝二字汝能尽レ心、吾平生所レ著文字、宇野仲甫吾同志也、謀レ与校訂勿レ令二遺失一、君延知レ我最深、可レ使レ銘二我墓一、臨レ終作レ歌親筆云云一、不レ言二余事一遂逝矣、延享四年冬十月十八日也、年二十九、視レ死如レ帰、雖二古人易レ簣何以加レ此、卜二地東都忍池之西一葬二教安寺一、祐世以二君之遺命一請二銘於予一、則泣而書レ之、其銘曰、

無量麟斃二艸中一 問二之乎天一 明月清風

小宮山昌世君延甫撰

男 祐世建

延享四年歲次丁卯冬十一月

長夫の出自や家系等については、森銃三氏の「河津美樹の妻清原氏」⁽¹²⁾や丸山氏の「加藤宇万伎」に譲つてここには贅しない。昌世のことは、文中に「宇野仲甫吾同志也、謀レ与校訂勿レ令二遺失一、君延知レ我最深、可レ使レ銘二我墓一」とあり、遺稿を託すべき人物として宇野仲甫の名を挙げたのち、自分を知ること最も深いため碑文を草するのに最適として昌世を挙げる。二人の親交思ふべしであるが、いずれも春台に学んだという同窓の縁に因るものであろう。ちなみに長夫が亡くなる五年前の寛保二年に、春台が長夫兄の祐之の碑文を撰したことは、「春台先生紫芝園稿」後稿卷十一所収の「河津君碑陰」によつて明らかである。それによれば、長夫の紫芝園入門は、兄祐之の遺言による由であり、あるいは長夫の碑文も本来なら春台が選ぶべきところ、同じ延享四年五月三十日に先んじて他界したため果たさなかったと言ふことかも知れない。

また、碑文中に「真淵告『我輩』曰」として、長夫の歌文の力量が昇堂から入室の域に及ばんとしていたことを言う。昌世が真淵に学んだ事実は認められないこと既述の通りであるが、長夫を通じて接触の機会を持ったことは充分考えられよう。長夫と真淵との関わりについては、やはり丸山氏の「加藤宇万伎」に譲り、今は自筆歌稿『真淵歌集』二に見える次の記載を掲出するにとどめたい。

河津長夫は、大和の学をわか導侍るに、もとよりのふみをもよくよみつれはいとまことにして、いにしへにかへる志ふかく侍りつるを、わつらひて十月十七日に身まかりつといひおこせたるを聞に、いと口をし、其後予いひつかはすついでに、美樹かもとにおくるふみのおくに

わか道もさそはん人をぬは玉のよみにおくりてまどふ頃哉

となん、又長夫か今はの時に、大夫はむなしく成てち、母のなけきをのみや世に残さまし、といひて且志しとけさるを美樹につきて、名をも顕はしてよ、かねて作れる詩歌の事はしかせよ、なとまでこまやかにいひおきけるよし、ふみに見ゆるに、此歌は憶良の大夫の、ますらをやむなしかるへき万世にかたりつくへき名はた、すして、といふをおもへるなるへし、いとあはれにこそ、菊の花をおくるに、

白きくは冬たにかくてある物をまたきと露のうせにける哉

ほかなから外ならすしもかなしきにうちのうちこそおもひやらるれ

如此はいひつれと、かゝる時余りに歌かちなるもいかゝにてやらすなりぬ

真淵の文と昌世の碑文を照らしてみると、永訣の詞のうち遺稿については碑文の方が詳しいが、辞世の歌については、碑文には「臨レ終作レ歌親筆」云云」とあるばかりのところ、真淵によつてそれが憶良の万葉歌を踏まえた「大夫はむなしく成てち、母のなけきをのみや世に残さまし」であることが明らかにされている。長夫歌は、

兄祐之について、両親に先立つ無念さを出したものであるが、両親の哀惜もさることながら、将来を嘱望していた愛弟子を失った真淵の悲観もさぞやと思われる。

○寛延三年庚午（一七五〇）六月五日、河津祐之、長夫（裕章）兄弟の父祐篤の墓碑銘を撰する。

この碑文も丸山氏の「加藤宇万伎」に紹介されるところであるか、⁽¹⁴⁾改めて左に掲出する。

先生氏河津、諱祐篤、字正伯、本姓松井、父九郎左衛門、其先建久之朝、為三豆州之名族、母南畝氏、承応二年癸巳春正月十八日生三子筑前之福岡、先生有三大志、歳甫十六、遊三学長崎、友三華人、居十余年、後之三京師而学索、喜三禅問、即非木庵両和尚、一、氣熟旨契、得三印可一矣、一日自謂、救三人不三業医一也、終為三国手一、来三東都一、仕三戸田侯一、年七十八致仕、寿九十有八仙逝、実寛延三年庚午夏六月五日也、配三小泉氏一、有三子一、長祐之、次祐章、不幸先没、孫祐世主喪而葬三諸城北教安寺一、臨授三筆作三詩、親書、即銘之

吾是海面一老仙 無端尸解武陽天 縦能服得三金茎露一 難三復三人間越三百年一

小宮山昌世撰

孫 祐世建

昌世が祐篤の碑文を撰したのは、もとより長夫との交際に因むものであろう。長夫の碑文に比して文章が簡疎であり、かつ昌世と祐篤の直接の関わりを窺知すべき記事もない。

○宝暦二年壬申（一七五二）十一月、【篆書唐詩選五言絶句】に添えられた金谿の序文を書く。

【篆書唐詩選五言絶句】は、関鳳岡の門人関口黄山の著作するところで、書名の通り、【唐詩選】をすべて篆書をもって書し、なお上欄に当該篆書体の異文を掲示したもの。唐本仕立ての大本一冊で、刊記は「宝暦三季」^癸

西三月／皇都 茨城多左衛門／東都日本橋南式丁目前川六左衛門」。序は「宝暦二年仲冬 守山金谿漸斎宇鴻」「宝暦二年六月 静斎河口子深序」「寛保三年癸亥初秋 黄山関口忠貞世篤父撰并書」の他序二・目序一、跋は「宝暦二年壬申季夏 官医杉浦亮通昌順甫識」「宝暦二年壬申夏六月 鳳岡関思恭識」「宝暦癸酉春 水藩南溪越克敏跋」の他跋三である。本書の成立は、鳳岡の跋が語るところによれば次のようである。すなわち鳳岡は小石川在住時代、その書を求める者が門に盈ち、巻軸縦横倥偬として暇なく、書きさしの「小篆偏旁分類」および「篆書唐詩選」も空しく案上に置いておくはかなかった。かかる様子を見た、若い頃からの門人で穎脱の志のあつた黄山が、その故を問うたところ、鳳岡は先師細井広沢の志を襲いで篆書の編纂に手を着けながら、多忙のため意に任せないことを答えた。よつて、黄山は広沢、鳳岡の志を善として、「篆書唐詩選」の完成を自らの後生の当務とすべき意志を申し出たので、鳳岡は当時盛行していた明の李于鱗の『唐詩選』に基づいて書を成すよう言い、その草稿を与え著述の体要を説いた。黄山は同門の本目子芳と謀り、『陳氏彙選』に拠つて字の検出をはじめ、さらに四方の諸書を渉獵して奇字の検索に竭力したために、書はすでに成らんとしたが、不幸、黄山は疾病に罹り逝折した。そのため鳳岡は、人琴共亡の悲しみに絶えず、かつ父休翁の舐犢の情を慰めたいとの想いもあり、子芳に相談して梓行に及んだと言う。

鳳岡は、名思恭、字源内、経字を太宰春台に学び、書は細井広沢の高足としてその令名は天下に鳴響した。とくに宝暦明和は唐様書家による法帖が盛行した時期で、鳳岡のそれも宝暦五年十月に刻石した甲斐路の「猿橋銘」その他が売出されたことが『明和書籍目録』によつて知られる。その業績などは、三村竹清の「近世能書伝」に詳らかであるが、なお細井九阜が明和九年に著した「二老略伝」⁽¹⁵⁾の次の記事を挙げておきたい。

関源内名思恭、号鳳岡、父は水府藩中の人伊藤氏関は母方、苗字也、伊藤氏多子也、思恭東都に遊ぶ時、和流御家流を能す八田氏の家

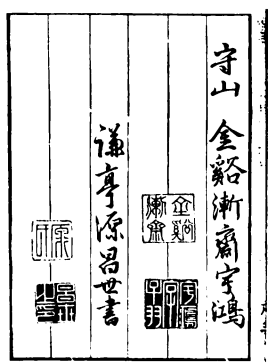
田は二位尼月光院、其後八田を辞しし後、広沢先生に入門す、東都牛込水道丁に居す、後土屋但馬守儒官と成、
殿の親戚の家なり

食禄を受、書進んで門人多し、雪山先生広沢先生の筆跡を以て照し見れば及はざる者遠し源内は古後村翁老人同様に入門す源内二十二才の時
成へし

右によれば、鳳岡ははじめ和様書家として月光院親戚の八田氏の家にあつたと言う。前稿では、昌世と同じく月光院の文苑に属していたらしきことから両者の交際を推定したが、そのほか昌世は鳳岡の師細井広沢と旧知であること、さらに同じ春台門であることや、鳳岡が昌世の住居に程近い牛込水道丁に住んでいたことなど、二人を結び付ける要素は少なくない。また昌世は、宝暦六年に「篆書唐詩選七言絶句」出版の周旋役を買って出ているなどから推して、鳳岡との交友も相応のものであつたと推定される。

さて、昌世が書を受持った守山藩の金谿漸斎宇鴻の序は次の通りである。

苗而不秀者有焉、秀而不実者有焉、難矣、才之於人也猶窮日之力、耨之耕之乃灌乃漑、旦暮往視之、而鮮能成一矣、才之難也今猶復古乎、関口氏、子曰世篤、敏捷敦厚少学篆、鳳岡氏、子肅助



【篆書唐詩選五言絶句】序文

苗長一矣已、夙成竟著二斯書、事詳子肅語中、無二何苗則稿一矣、子肅哀三其不レ如二稗茅一、以二其書二謀三于余、余有レ感焉、一日白二我公一、公視而泫然淚下、少焉曰、古之君子育レ才、盖如レ不レ可二以已一也、夫伊人而短命、痛哉、雖二小道一其不レ恤哉、汝勉三旃成二人之美一也、君子矣人之有レ美若二己有レ之、亦唯己之美而已、公之愛レ才雖二旁伎一必取レ焉、此所三以余之若レ不レ得二已然一也、故余無二宿諾一、遂以上梓而竊、斯之学未三之聞レ如二其考訂一、則関子肅尽レ心焉耳矣、

以為序

右の序は、金谿が、この書が世に埋れることを哀れんだ鳳岡の志を受けて、藩侯松平頼寛の高覧に供したところ、頼寛は君子の育才愛才の要を説き、痛恤の情を示したので、公刊に尽力したことを述べたものである。金谿に就いては、他にほとんど手掛りを得ないものの、署名の「金谿漸斎宇鴻」のうち、金谿は雅号、漸斎は斎号、宇は修姓、鴻は名と考えられ、まったくの憶測であるが、後述の田中江南の養家宇留野氏の可能性はないであろうか。

また頼寛は、号黄竜、画名仙子、水戸光圀の孫に当たることもあつて、日頃からその遺徳を慕った。宝暦三十年十月二十八日六十一歳で没し、常陸国久慈郡の瑞竜山墓地に葬られた。荻生徂徠を師とし、服部南郭と親しく交わり、平野金華を儒官に招くなど、謨園派の権門として鳴世し、著編書に『大三川志』や『論語微集覧』がある。また、延享三年、新田義貞の忠烈を表彰して南郭の撰文、葛烏石の書を得、自らは篆額を刻して新田神君之碑を建てたことでも知られる。かく頼寛は、好学大名として当時の学芸界に絶対な勢威を持していたために、おのずから頼寛を中心とする文苑が形成され、かつその庇護を求めて雲集して来た人士も少くなかるべく、さしずめ昌世などはそうした中の一人と言うことができる。

ところで、序跋者のひとり、名越南溪は、昌世の著『発蒙書東式』にも序文を寄せており、交際のあったことが明瞭な人物である。本書の跋は、黄山の拳を称えながら、其の人を見ざることを惜しんだ短文で、あるいは昌世が依頼したものであろうか。南溪の略伝は、青山延于著『文苑遺談』巻三に、次のようにある。⁽¹⁶⁾

字子聰号南溪称二十歳居閑齋稿、享保十九年仕本府一後二総裁一。食二二百五十石系纂

克敏少受二業林鳳岡之門一、為二昌平学都講一、与二秋山儀一以二文章一名二時一、既而克敏以二鳳岡之薦一仕二本府一。其在二東武一交遊甚広、一時侯伯亦多礼二遇之一。及レ赴二水府一賦レ詩送レ別者甚衆、諸侯則守山侯源

頼寛、熊本侯源重賢、宇和島侯藤政徳、日出侯豊俊泰、及我楽山公子、儒林則林鳳岡、岡孝先、井孝徳、秋山儀之徒、詩凡若干首、集為二一卷。曰「陽関遺音」云。援陽関遺音及先大人話（略）南谿以二安永六年五月十六日二没。

年七十九講系葬于江戸本郷喜福寺一。

すなわち、若くして林鳳岡に學んで昌平臺の都講となつた南溪は、その鳳岡の推薦によつて水戸家に仕え、享保十九年には史館總裁に任じたと言う。またその交際はすこぶる広きに亘り、南溪が常陸国水戸に赴くに及んで送別の詩を賦した中には、守山侯松平頼寛、熊本侯島津重賢および水戸侯宗翰の兄松平楽山や林鳳岡、秋山玉山、渋井太室、岡井嶮洲など、錚々たる人々が名を列ねている。かく見ると南溪も又、頼寛や楽山公子を中心とする水戸芸苑の一員であつたとみて誤りなかるべく、その文雅については名越漠然著『南溪先生小伝』⁽¹⁷⁾に詳しい。

ところで、『文苑遺談続集』の「立原万」の条に、大内熊耳らに就學し、若干にして嶄然と頭角を顯した翠軒について、

時田江南來客「水府」一、開レ社講授、先生又從レ之游、先レ是水府學者率二主宋學一、至レ是江南首「唱古學」一、而先生之徒左「右之」一、府下之士靡然從レ風、於レ是越南谿為二總裁一、素不レ悅「古學」一、其它夙儒老生亦皆習二宋學一、視二先生之徒一称レ為二異學一、至二斥二先生一為上レ犯二學禁一、於レ是謗言紛起、以レ故先生沈滯累年

⁽¹⁸⁾とある。つまり翠軒らが江南について古學を學んだことを南溪は喜ばず、ために謗言紛起して翠軒は數年に亘つて沈滞したと言うものである。たしかに『文会雜記』で常山は「水戸ノ史局モ學者今ハ寥々タリ。名古屋十藏總裁タリ。中々ヨキ學問ニアラズ」と述べており、南溪の學問に異和感を抱いていたが、これは護園派に共通した評価であつたかも知れない。また、杉田雨人の「長久保赤水」に掲出された赤水宛南溪書簡に、

根源も済し不_レ申候て、古文辞じゃの宋朝じゃのと、末々に走り申し候事は、片腹いたく御座候、まして経義を弁へぬ者に、論語徴などを見せ申し候事、扱て脚根も忘れて、雲へ飛び乗りの様なる、あてとも無き事に御座候

(20) 云々とあるところによれば、その学風は宋学、古文辞学のいずれにも是々非々の立場をとる折衷学に近いものが感じられる。よって、南溪が古文辞に靡然とする水戸の若き学徒を喜ばなかったのも宜なるかなの思いを禁じえない。しかし、松平頼寛、岡井嶺洲ら謾園派との交際も深かった南溪が、古文辞という理由だけでその学者を排斥したとは考えられない。原因は、翠軒らが従学した田中江南の行状そのものにあつたのではあるまいか。

岡沢慶三郎氏の「田中江南の墓碑発見と其事蹟に就て」(21)に紹介された岡山西宝寺の墓碑によれば、名は応清また清、字子纓、通称三郎右衛門で、父高島舛見は土浦藩医であつたと言う。安永十年二月六日五十四歳で没した。謾園派の大内熊耳について詩文を修め、二十歳頃、「守山侯臣宇留野通門。奇_二愛其敏学_一。乞_二其考_一以為_レ嗣焉。故冒_二姓宇留野_一」とある通り、守山藩の家臣宇留野の養嗣となる。この宇留野氏と金谿漸斎宇鴻と何がしか関係ありやと感じられることについては前述のごとくである。

その後、宝暦七年には前年よりの疾病により致仕して保養するの止むなきに至るが、同年には常陸府中（石岡）、同十年には水戸に移居、この間その膝下に谷田部東壑、立原翠軒をはじめとする従遊者が聚まり、古学の新奇な言説が受容された。さらに江南は、日光、仙台を遍歴して、明和四年には江戸東叡山下に投壺道場廿谷園を開き、ついで同六年には、大内熊耳、戸崎淡園の序跋を添えて『補正投壺新格儀節』を発刊するが、その附言に「一日侍_レ燕語次。及_二投壺_一。予以_三其所_レ知_二一二_一白。公曰投壺也古礼。而知者蓋鮮矣。温公新格雖_レ可也。尚有_二可疑者_一焉。汝博徴_二於他書_一正_レ之」とある通り、江南が投壺の古式を追求したのは、そもそも頼寛の命による

ものであった。なお岡沢氏の御論によれば、明和、安永期の江南の動静はほとんど不明のよしであるが、明和八年十一月五日付の本居宣長宛谷川士清書簡の一節に、「さりし頃、その御地へもまゐりし儒士投壺先生田中氏より、神道のあらましをと申こせり」云々⁽²²⁾とあるので、当年、伊勢に遊んで津の谷川士清に神道の趣を問うたことを付加しておきたい。

この江南について、翠軒の「祭江南先生文」には、「先生行蔵、玩世浮沈、滔々天下、何処足留」云々⁽²³⁾とあるが、とかく漂浪、遊説を事とし、奇矯な言説を弄する銜学の徒との印象を拭い切れない。かような江南を、史館総裁として水戸家の文教に対して重責を担うべき南溪が、快く思わなかったのは、想像に余りあるものがある。

○宝暦四年甲戌^(一七五四)、この頃、甲斐の加賀美光章と親交する。

光章の『梅塙文集』所収の昌世宛光章書簡の一部に述べるところを、いま原本が所在不明であるので、『西山梨郡志』から転載する。⁽²⁴⁾

始足下為^レ宰^ニ本州^一、公余多暇、延^ニ召^下輩^一、薦^ニ龍才俊^一、因^ニ足士之受^レ知奉^レ德者不^レ少、而不佞尚幼
不^レ得^レ与^ニ於^ニ拝趨之列^一、自^ニ足下^一告事不^レ合、遂用^ニ解職^一以及^ニ于今^一、幾乎二十年、嘗見^下州人愛慕顧^中
念^下日野復還^上旧任^一再撫^上、臨^ニ于此^一而私心甚高^ニ其義^一、乃願^ニ執鞭之日^一久、然山川遼絶、不^レ得^ニ一^一謁盛
容^一、復欲^レ致^ニ一行於前^一、以代^ニ投刺之礼^一

文中に「用^ニ解職^一以及^ニ于今^一、幾哉二十年」とあり、昌世が享保十九年に解職されて以来、二十年に及ぶとあるが、それを正確に解すれば宝暦四年の書簡と言うことになる。右の書面によれば、昌世は石和代官在職中、閑暇を得て才俊の薦龍に努めた結果、その恩顧を蒙る者少くなかったが、光章は幼少のためいまだその列に加われず、不本意ながら荏苒二十年の歲月を送ってきた。さるに今だに領民が昌世を愛慕し、その行跡を顧念するのを

見るにつけても、教示を願う想いは募り、ここに一書を呈する決意をするに至ったと言う。かく両者の交通は、昌世の高名を恃んで認められた光章の一通の書簡によつて開かれたのである。

光章は、本姓間宮氏、通称小膳、叙爵して従五位下信濃守、桜塙と号した。天明二年五月廿九日病没、七十二歳。幕臣間宮高成の男で、若干にして京都に遊学、修業ののち帰郷し、家を継いで山梨郡小河原村山王神社神主となり、垂加神道を奉じて享保十八、九年頃、家塾環松亭を開き諸生を導く。また明和四年山県大貳昌貞の事件に連坐し、子息光起と共に獄に下され、取調べののち罪を免れて帰郷するが、失意のうちに余生を終える。

さて、同じく宝暦四年中かと目される八月廿六日付光章宛昌世書簡に次のようにある。⁽²⁵⁾

一、先日御約束申候三輪善藏先生著述神道臆説一本、懸二御目一申候、緩々御覽御かへし被_レ下_レ成候

一、先日御かし申候て御写被_レ成候仙台屋商一件記事少見合申度事有_レ之候間、御かし可_レ下_レ候

執斎三輪善藏希賢は、前稿に既述したごとく、陽明学をもつて鳴世した道学者で、その著『神道臆説』は、自らの神道説を平易に説いたものであるが、神儒一致思想に基くところに特色がある。写本で行われ、奥に元文五年五月の年月を表記する。おそらく本書は昌世の方から推薦したものとおぼしく、そこに学問に対する彼の好尚がおのずから表れている。もつとも執斎と昌世は早くから交際があり、かつて昌世の依頼により貞女栗女の碑文を撰した執斎の著述を貸借したことは自然の成行きと言うべきかも知れない。ちなみにその後、光章が執斎の功を隠蔽して新たに碑文を撰したのは、『甲斐国社記・寺記』第一巻に掲出の資料に「甲府勤番支配渡辺図書頭殿勤役中被_二仰付_一、当国八代郡南田中村節婦之碑文相撰差上申候」⁽²⁶⁾とある記事と、『甲斐国歴代譜』に「⁽²⁷⁾安永六年渡辺図書守」⁽²⁷⁾とあるのを照らしてみれば、昌世の没後のことである。なお、右の引用中、「仙台屋商一件記事」とあるのは未詳ながら、参考のため掲げ置いた。

さて、右の書簡に相續くと考えられる十月十八日付書簡に曰く。⁽²⁸⁾

一、先達日御用立候^{神道臆説二冊}御返し請求申候

一、前日御頼被^レ成候文庫藏書之事、随分伝説申候、四書素本一部五百石一幀^{書本也、唐本もまれ物もの}寄進申度とて、^僕請取置申候、近日出府之節御渡可^レ申候^{中略}

一、伊藤左膳分書状遣申候、此生東都を立退候後、居所も不^レ存候処、此度書状差越申候、足下故知之由申越候、此生大分に書を所持申候は、退散之砌如何成御申候や、御尋被^レ成候、何ぞと神納申し候（下略）

はじめの一節に『神道臆説』と共に「書簡式」とあるのは、朱舜水の「書簡式」のことと目される。昌世は宝暦五年に「発蒙書柬式」を編集出版するが、同書では「舜水談綺」を参考しており、あるいはこの時もその必要に迫られて返却を求めたものか。

次の一節に「文庫藏書之事」とあるのは、野田成方の「裏見寒話」（宝暦四年成）に、「^{小河原山}加々美河内^{神儒の書藏を建ると欲す。}」とあるごとく、宝暦四、五年頃、山王神社書庫設立の志を起こし、「山王神社募書疏」一章を草して諸方に募書を呼び掛け、神書、経書、史類その他にわたって書籍の蒐集に努めたことを指している。昌世は光章の募書のために宣伝方を相勤め、さっそく「四書素本一部五百石一幀」寄進の約束を取付けたと言⁽²⁹⁾うが、

他の一通に「一、日比申入候堀田通頌奉納之五百石一幀四書素本一部此度之便に遣」云々と見えており、古鈔本四書の献本は堀田通頌なる人物の篤志によることが知られる。通頌は未詳であるが、最後の節に所見の「伊藤左膳」については、やはり「裏見寒話」に、⁽³⁰⁾

曲淵 田中左膳 谷川新助門葉 神字手迹国に名高し。^{是は伊藤左膳也。田中に非ず。}

⁽³¹⁾と出ており、僅かながら手掛りがある。谷川新助はもしや谷川新助元淡の誤りではなからうか。

『西山梨郡志』には、さらに昌世と光章との交誼を示す伝承として、

某年石和代官小宮山奎之進昌世と謀り、仁明天皇の皇子守国親王を祀ると伝ふる守国明神の社殿を更造す⁽³²⁾とあるが、これも代官罷免後、おそらく宝暦中のことであろう。守国親王の伝説については、『寛永諸家系図伝』またそれを踏襲した『寛政重修諸家譜』巻一四八の「三枝部氏」のくだりに、その始祖伝承として載る。詳しくは、それらの資料に拠りたいが、要するに、仁明天皇の御宇、八幡宮の神告により示現した童子は、三枝の氏を賜い守国と名付けられ、長じて九州の異賊を退治してのち禁裏に久しく宿直するが、故あって甲斐山梨郡に配流される。没後、同地に男守将が守国の廟を建てて三枝の神と崇めて以来、その祭祀は年々絶えることなく執行されてきたと言う。昌世は既述の通り、三枝氏を始祖と仰ぐ辻氏の出身であり、ために光章と共謀して山梨郡穂坂村（現韮崎市）の伝説の地に守国明神の社殿の再造を思い起つたものであろう。ただし、『寛政重修諸家譜』は、この伝説の最後に、「今按に、家伝の説はなほだ奇怪に涉り、且寛永譜も家伝としてこれを加ふといへども、旧説たるにより、しばらくこれをするす⁽³³⁾」と記すごとく、かかる奇怪な家伝を官撰の系譜に記載することを躊躇しているごとくである。

○宝暦五年乙亥（一七五五）九月、尺牘字の書『発蒙書柬式』を編集刊行した。

本書は、出版された昌世の編著のうち唯一伝存するもので、『割印帳』には、

同（宝暦五）亥九月
発蒙書柬式
墨付百十八丁

小宮山昌世述 全三冊 板元

小川 彦九郎

山城屋茂左衛門

とあり、⁽³⁴⁾くだんの二書肆の相板であるかのごとくであるが、架蔵の初印本の刊記には、「宝暦五年乙亥九月／書

林 京都六角通御幸町西入 茨城多左衛門／江府日本橋通 丁目 前川六左衛門（印）とあり、小川彦九郎が本店の茨城多左衛門

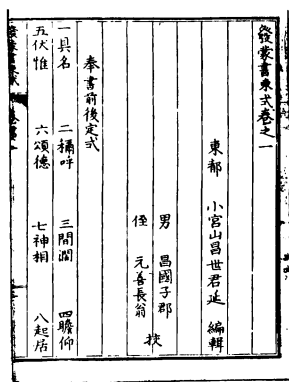
に、山城屋茂左衛門が前川六左衛門に変わっている。板元ないし製本が前川六左衛門であることは板元印を捺すことによって明らかであるが、なお「書林」の二文字が「前川六左衛門」のほぼ真上に位置することから、「茨城多左衛門」の方は余白に補刻した可能性も強い。砥粉色の表紙の料紙は薄目、題簽は明朝体で「発蒙書東式」（一三）、装訂は四針眼訂法の唐綴と、すべて当時流行の唐本仕立てにつとめている。

名越南溪の序文は次の通り。

朝而有レ詔詰三冊令之製一、家而有レ書啓三牋牘之用一、而文殊三其体一、則裝飾長短亦当レ随レ異三其式一矣、蓋簡ニ於古一而備ニ於今一者焉、明鑑於三数代一郁々乎、礼文尤具レ事、為ニ之制曲一為ニ之品宮一矣、君延好レ古之余、稍々編三纂明人書東式一、業已為ニ一成書一矣、尊卑親疎之等、慶吊称呼之差、班々可レ觀也、固文秘三度

閣一、殆將為ニ虫糸蠹粉之資一、頼三書肆之請一付ニ之梓一、亦是礼經之一端、寧文房之雅举已也

宝曆乙亥年常藩越克敏題ニ於況軫洞一印



小宮山昌世著『発蒙書東式』巻首

右の文中に「稍々編三纂明人書東式」とある中の一つは、加賀美光章に貸与した「書東式一冊」を指しているようか。とまれ、昌世がかねて尺牘学に造詣が深かったことは、享保十九年の伊達吉村宛書簡の書振りからしても知られるところであった。さて『発蒙書東式』は、唐土明代の尺牘学に基づきながら我邦の書式にあてはめた書物であるが、内容は巻一が「奉書前後定式」以下計四十五、巻二が「家書式」以下

二十七の条目を立て、それぞれ文案や上書の形式を具体的に述べたもので、宛名や差出人には著名な故人の名をそのまま用いる。また白紙のほかに紅箋や紅藤紙を用いる時は、砥粉色を施してこれを区別し、さらに封印や落款などの印章は彫板とは別に調製したものを朱で押捺するなど、手の込んだ体裁である。

凡例によると、まず寸法についてはもっぱら『舜水談綺』を基とし、書式はほかに明の鍾惺撰『時用雲箋』、同じく馮夢竜撰『折梅箋』などの文例集を参考し、なお『舜水談綺』中の解しがたきは安積澹泊に問尋したとある。

『舜水談綺』は、披見した茨城県立図書館蔵半紙本四冊⁽³⁵⁾によると、題簽は「舜水朱氏談綺 上」、刊記は本文最終に「宝永戊子年書林茨城多左衛門寿梓」と陰刻するが、さらに蔵版目録の末尾に「正徳三年癸巳正月吉旦」、また匡郭外の左隅に「六角通御幸町西へ入 書林多左衛門」とあり、正徳三年後印であることがわかる。版元は水戸家御用書肆と言うべき柳枝軒。また、「宝永四年丁亥仲冬穀旦／水戸府下澹泊斎安積覺叙」の序を添え、序者の澹泊は、三十余年前に舜水の警咳に接したことを述べつつ、人見懋斎が舜水から学んだ書東式、衣服説、葬祭式などの諸説と、今井弘済が問學した事物名称を併わせて、公命によって刊行に及んだ経緯を記す。そのうち書東式は、「明舜水文恭朱先生東式」と題して巻上の冒頭に置かれ、「封筒式」以下の各条からなり、末に懋斎の貞享元年跋を添える。昌世が、この『舜水談綺』の書東式に述作の基礎を求めたことは、凡例によって明らかであるが、両書を比較すれば、内容のみならず体裁等も踏襲していることがわかる。

著者の舜水は、今さら贅言するのも憚られるほど高名な人物であるが、一言すれば、名之瑜、字魯璵、天和二年四月十七日、八十三歳で没し、文恭先生と諡された。漢土浙江省余姚県の人で、明朝の遺臣として清朝に抵抗したが、挫折のち我邦に亡命、帰化する。しかして徳川光圀によって招聘され、厚遇を享けるところとなり、

水戸家賓師として教学に貢献した。また、『舜水談綺』を編集し、昌世から問尋を受けた安積澹泊は、名は覚、字子先。ごく若年時に一時、舜水に師事した経歴をもち、水戸史館総裁に任じてからは、『大日本史』編纂に精力を注いだ。元文二年十二月十日に八十二歳で没しており、それ以前、昌世は澹泊に問學していたことになる。

さて又、凡例によると、『舜水談綺』等の諸文献に所見の名物のうち解しがたいものは、長崎の通事某および伊東快鳳に尋ねたとあるが、快鳳は、『文会雜記』卷之一上に、

一、伊藤快鳳が唐音ヲ自分ニハ官音ト云ヘドモ、声ハ時々違フヨシ、サレドモ俗語ハ随分ヨク覺タリ、ト春台云ヘリ

(36)とある、唐音に通じた人物を指しているよう。また、官職や有職故実に関することは、野宮定基と伊勢祐和に尋ね明らめたと言ひ、定基は昌世の有職故実の師で既述したが、祐和は未詳である。かくて昌世は、先学の学書はもとよりのこと、師友、知己の知見を総動員して本著の述作に努めており、その意気込みのほどが窺える。昌世がかかる書物を企画した背景には、古文辞学の流行により明代の尺牘学が盛行し、李攀竜撰の『滄溟先生尺牘』や王世貞撰の『弇州先生尺牘』などの別集や、同じく王世貞編の『尺牘清裁』などの総集が我邦でも重刊され、珍重されたことが上げられよう。ちなみに、先の紹介した『弘采録』の伊達吉村宛書簡の本間光丘の識語に、『尺牘清裁』と校正し上梓させ芸苑に功ある人なり」と言うのは誤りである。『尺牘清裁』の和刻が、徂徠門の林義卿によって明刊本をもとに重刊されたものであることは、同書に添えられた寛延四年春の那波魯堂の序に「尺牘清裁旧刊先有。秘恨我東方未嘗上梓。属日林君東溟求得原書一校定而重鐫之。」とあることによつて明らかである。ただし明刊本は古代から明までの総集六〇巻補一卷であるが、和刻本はそのうち明部のみの五巻一冊に過ぎない。また版元は、東北大学狩野文庫本の巻末に付された蔵版目録「一止人蔵版書目録」に「皇都

書肆

寺町五条上町

額田氏伊勢屋正三郎梓行」とあるごとく、京都の書肆である。とまれ、くだんの和刻はいずれも

書簡の文例集であるが、昌世の『癸亥書東式』は舜水の先著に基くとは言え、単に文例集にとどまらず、尊卑親疎、慶吊称呼の多岐に亘る書式の事例によって構成された、優れて実用的な学著であるところに大いなる特長が認められよう。

○宝暦六年丙子（一七五六）十一月、横山其寧編の『篆書唐詩選七言絶句』の出版のために尽力する。

本書は、宝暦二年に既刊の関口黄山編の『篆書唐詩選五言絶句』の姉妹篇で、やはり『唐詩選』の七言絶句を篆書によって示したものであるが、異文は卷末に一括して示し、検字に備えて「異文附録引字捷徑」を付してある。唐本仕立ての大本一冊で、刊記に「宝暦六年丙子十一月／東都日本橋南二丁目前川六左衛門（印）」とあり、柱に丁付の他「清閑斎藏」と刻すのは、『篆書唐詩選五言絶句』と同じ。戸崎淡園と岡井嶮洲の二序、および関鳳岡の跋を添える。

淡園の序は、はじめに「寛君嘗言、文運興時隆^二淇書学^一」と、文運が興隆する時は書学が盛んになると言う、松平頼寛の語から説き起こし、我邦の書学の歴史に触れ、江戸の細井広沢の功績を称揚したのち、黄山および其寧の学業に言及するというものである。淡園は守山藩儒で、字哲夫、名允明、同藩儒平野金華の門に学び、頼寛の信任厚く、藩校養老館教授、御用人役を歴任し教学に力を用い、守山藩儒としては随一、名が顕れた。時代は下るが、寛政五年五月、陸奥安積郡片平村の王宮神社に建石された、按察使として当地に赴いた葛城主に采女が献った、安積山の井歌の由来を記した「安積山東葛城王祠碑」は有名である。

また、本書の成立事情については、岡井嶮洲の序に次のごとくある。

嚮関口氏之子所^レ著篆書唐詩選、徵^二序則子肅氏之門人^一也、而述^二師之志^一也、我卒^レ業而嘆曰、善哉、子肅

氏之教^二後生^一也、方今濟南之選大行^二寓內^一自^二學士大夫^一至^二髫齡之童^一、盖不^レ朝誦而夕諷如^レ玉不^レ去^レ身也、今此書之行也繙^レ焉以^レ慣^二乎目^一、書^レ焉以^レ熟^二乎手^一、久而視^二猶真行^一也、非^レ嚮^二所^一謂役々乎勞^レ心摹写者之比^一、庶幾乎、篆籀之學由^レ是而興焉、善哉、子肅氏之教^二後生^一也、惜^二其業僅止^二于五言絶^一、塵々易^レ尽矣、未^レ聞^下有^二繩武畢^一功者^一而出^上矣、迺者謙亭源君出^二一卷^一授^二孝先^一曰、此篆書唐詩選七言絶横山生所^レ著也、亦子肅氏門人也、生^二工^二于書^一、兼覃^二思篆文^一、其所^二造詣^一亦非^二関口子之比^一、由^レ斯以往將^二漸及^二律古風^一、今以^二三七絶^一上^二于梓^一

すなわち嵯洲は、まず鳳岡が後生を導くのに李攀竜撰（濟南之選）の『唐詩選』をもつてすることに賛辞を送り、かつ篆書の学が興隆することを庶幾していたところ、黄山の五絶に続いて其寧が七絶について篆字を編輯したことを昌世（謙亭）を通じて報じられたと言う。つまり、本書の梓行にも昌世が奔走周旋していたらしきことが知られ、かつ淡園の序を併考すれば、今回も頼寛周辺の人々が動いていたことも明らかとなる。

嵯洲は、通称文次郎、字仲錫、『水府系纂』巻六十三によれば、享保九年十二月に水戸家に招聘され、史館編集を勤め、同十八年十一月に暇を賜わつて讃州高松侯に仕えた。平野金華の『金華稿刪』巻四に「送岡仲錫適水藩序」の一文が収められるが、水戸の修史事業振興のため、小宮山桂軒、名越南溪らと同様、他家から拔擢入館したうちの一人である。またのちに仕えた高松松平家は、守山藩と同じく水戸家の御連枝の一で、江戸屋敷も水戸家や守山家にほど近い小石川水道橋に存しており、とくに高松侯松平頼恭は守山侯松平頼寛の弟に当たる。『南郭先生文集』四篇巻一に「守山侯園会岡仲錫別來二十年執手相泣詩以叙旧」と題する五律があることを思えば、嵯洲も頼寛の雅筵の一員であつたと言えそうである。

○宝曆九年己卯（一七五九）八月二日、隱居する。

昌世の隠居については、『寛政重修諸家譜』巻一五二に「宝暦九年八月五日致仕す」⁽³⁸⁾とあり、『断家譜』には「宝暦九月己卯八月二日隠居」⁽³⁹⁾とある。昌世の子供はいずれも女ばかり四人いたが、そのうち三人が夭死、生き残った二女に養子昌国を迎えて、家督を継がしめたのである。その略歴について、『断家譜』が述べるところを左に掲出しておく。⁽⁴⁰⁾

某

主計 内膳 隠居佳山

実鈴木忠兵衛政成二男

実母小宮山友右衛門昌言女

妻大岡右近女

宝暦九己卯八月二日家督、入小普請松平頼母支配、^(近明)同十二月壬午十二月七日家督一同御礼、明和六年己丑七

月二十四日入西丸小十人組、其後小普請神尾若狭守支配時安永六年丁酉十二月十二日隠居、後改佳山、天明

元年辛丑十月二日没、葬長慶寺、法名音声院皆得解脱

実父の鈴木政成は鈴木三郎九郎祐政の三男で、『寛政重修諸家譜』巻一一五四の当該条に祐政について「実は松平甲斐守家臣柳沢因幡保教が男」⁽⁴¹⁾とある。また、『寛政重修諸家譜』は、昌国について「安永六年十二月十二日致仕し、のち逐電す」⁽⁴²⁾と述べ、さらにその男太郎兵衛は父親慎居の間、無頼の徒と交わり、娼家に遊んで田舎の寺院に身を隠すなど、武士にあらざる所行に及んだとして遠島に処せられ、ここに小宮山家は断絶の止むなきに至ったのである。

○宝暦十年庚辰（一七六〇）九月、『手習童蒙七尽』を出版する。

「割印帳」に、

手習童蒙七尽

小宮山昌世
君延甫選

全四冊

願人 前川六左衛門

墨付七十三丁
巳九月出版

(43)

とあるが、実物は伝存不明で、いまだ管見に入らない。書名より想像するに、通俗的な書の手本で、いわゆる往来物の類であろう。とくに「手習」の語からは和様の書風かと推測され、昌世が板下を書いた可能性も高からう。

○明和元年甲申

(一七六四
七十六歳)

六月十三日、多田義俊編「名賢和歌秘説」を書写する。

「名賢和歌秘説」(「和歌物語」)は、有職故実等に長じた和学者多田義俊が堂上諸家より和歌に関する話を聞き書した書物で、かつて「近世和歌文学誌」第一集でその翻刻がなされ、拙稿「多田義俊編述「和歌物語」攷」⁽⁴⁴⁾ではその諸本研究を試みた。また昌世筆の当館所蔵本⁽⁴⁵⁾については、松野陽一氏が「国文学研究資料館報」の「新収資料紹介」⁽⁴⁶⁾に一文を載せられているが、なお煩を厭わず必要な範囲で紹介することにした。

すなわち当館本は、美濃判写一冊、千歳緑色亀甲窠文繋ぎ地に竜文艶出し表紙の左上に鳥子紙の無枠題簽を貼り、昌世の手で「名賢和歌秘説」^全とある。本文料紙は楮で、墨付は四十四丁、巻尾に遊紙一丁を存する。毎半丁十一行書で、昌世により本行のほか墨朱藍の各墨により頭書、傍書、合点等が書入れられ、新たに序文、奥書および識語が付される。すべて昌世が丹精込めて調えた一冊というべきである。まず識語は、見返しに貼付された一紙に、

和歌てに波極秘伝抄 一冊

是ハ小本ニて御坐候

名賢秘説 一冊

是ハみの紙ノ大サ

右二冊共二私之おく書仕候

小宮山木工進

とある。「和歌にて波極秘伝抄」は、あるいは姉小路式の一書を昌世が繕写して新たに奥書を付したものと
思われるが、未見。次に奥書は左の通りである。

此一帖は桂秀樹子^{カシヲ}の案記也、桂子は京師の某公に仕えて、常に衣冠の諸名公に昵近して、和歌の秘説を承り
て記憶し所著也、然るを某君のひめ置給ひしを、^{昌世}此道に志有を感じ給ひ書写をゆるし給ひしま、頓に書写
し侍る、我子孫和歌に心さしあらんもの永くこれを宝とせよ

甲申夏六月十三日

此日明和と改元也

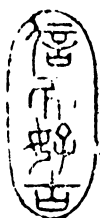
小宮山木工進源昌世

七十六歳謹書不許他見

桂秀樹は花園兵部といふ、芝山重豊卿に奉仕り、元は摂州多田の社の御家人といふもの也

右の奥書は、本書について、義俊が格別に堂上諸家から聞出した他見無用の秘書でありながら、昌世が和歌に志
厚いことに免じて「某君」がとくに書写を許したことを述べたものであるが、その「某君」が誰であるかは、さ
らに翌年に記された序文によって明らかとなる。すなわち序文の内容は次のごとくである。

此書の題号もとは和歌の物語と有、紛らはしき事侍る故、私に名賢和歌秘説と題号を改る、衣冠家諸君子の
秘説なれば、如此名付るとも不妨歟、去年の夏此一冊を近江守^{花房}源職朝朝臣ふかきよしみのおはしまして、



小宮山昌世印記

僕常に御身ちかくなれむつひ奉りし故にゆるし見せ給ひ、即写し留て猶愚見の事共書入しを再ひ見せ奉りしに、書付たる事さ
ま後鑑にも成へきま、かの御本にも書入よと仰こと侍りしに、
御本至て細字にて老眼書入るの勞を恐れて、昌世写し且書入た
るま、にて御もとへ奉りぬ、見くるしき筆のすさひ文庫のうち
にも入侍る事、予か為にめいほくとやいふへき、閣下に仕へま
つる能書の人、他日書あらため給へといふ事爾り

明和二年乙酉五月 小宮山昌世記

(印)(印)

右序文によれば、昌世は、前年夏に本書を花房職朝から借写して、さらに考説を書入れた当該本を一覧に供したところ、職朝は昌世の考説を自らの写本に書入れるよう要請した。昌世は、職朝の本があまりに細字本であるため書入れを成し得ず、代わりに家本として書写したはずの当該本をそのまま奉ったと言う。よって当該本は職朝への献上本ということになるが、昌世の手許には別にこの序文を欠く一本が扣として存したことも充分考えられよう。はたまた、昌世は職朝に「ふかきよしみ」があつたと言うが、詳細は不明と言うほかはない。職朝は『寛政重修諸家譜』に「明和元年六月二十八日駿府の城代となる」⁽⁴⁷⁾と見えており、六千余石の知行地を領した旗本の本身であり、その遺詠が松宮観山編『渚の松』に見える。なお本序文には、「信而好古」の朱文長円の関防印と「源氏」「昌世之印」の朱文陰陽二顆の落款印を捺すが、あわせてその印影を掲げておく。

○同年八月二十日、布施胤致すなわち山手連の狂歌師山手白人によつて『名賢和歌秘説』が書写される。

『名賢和歌秘説』は、幕府旗本層を中心に広く書写流伝した形跡が明らかであるが、そのうち東北大学狩野文庫蔵の一本は、昌世の奥書を転写したのちに、

此一帖昌世のもとより乞請て書写し侍る、もつとも^某か書写にたかはす、子孫猶昌世の言葉に准して伝えよ

明和元^甲年八月廿八日夜書写畢 胤致（花押）

とある。署名の「胤致」は幕臣布施弥二郎胤致のことと目され、昌世の書写後わずか翌々月のことであるから、両者の昵懇のほどが窺われる。ところでこの胤致は、浜田儀一郎によれば「教養の点では和歌を冷泉家に学び（『甲子夜話』）、文章は『徳和歌後万載集』序から察しても相当のものであり、狂歌の作も凡手でない。本名は布施弥二郎胤致、旗本で評定所留役をつとめ、天明初年から文藝面に名が見えて、恋川春町の黄表紙『鎌倉太平序』にもあらはれる」と称される、狂歌師山手白人にほかならず、『吾妻曲狂歌文庫』に北尾政演（山東京伝）描くところの肖像が収められる。ついでに、松浦静山の『甲子夜話』卷四十二の記事も掲げておこう。

「一九」今の奥右筆組頭、布施蔵之丞「胤毅」の父は、弥二郎「胤致」と云て、留役に終りしとなり。繁劇なる吏務の中にて和歌を好み、冷泉家の門人たり。没せし年は春より病悩なりしが、七月の比殆ど危篤に迫るとき、辞世とて、

なき魂の数にはいりて中々にうき秋風の身にぞしみぬる

とよみしが、又暫く快く、遂に八月に至り没しぬ。其時戯の狂歌に、

乾坤の外とよりこれをうちみれば火打箱にもたらぬ天つち

何^いかにも豪励の氣象なりけり「林話」。

白人が右のごとく本歌と狂歌に辞世を詠み分けて世を去ったのは、天明七年八月九日のことであつたが、本歌の

方はさしたる詠み手として評価されなかつたようで、冷泉門の幕臣が中心を占めた『霞関集』にもその所詠は見当らない。

なお白人は、四方赤人（大田南畝）に親しい山手連の一員であつたが、南畝はその著『一話一言』卷二十一に「謙亭筆記抄書」と題して、昌世の『謙亭筆記』から計二十三条を抄出し、末尾に「已上謙亭筆記より抄出す。謙亭は小宮山木工進昌世の号なり」と記す。⁽⁵⁰⁾さらに「一話一言」に触れたついで、同書卷三十六から「執斎詠草〔補外。三〕」と題する一条を補つておきたい。⁽⁵¹⁾

京保十年乙巳五十七歳在江戸

三月廿七日小金に於て御獵まし／＼けるを祝し奉りて小宮山謙亭子によりてをくり侍る

かねがさく小金の花がさくといふ春の日ぐらしいさむ御狩場

小金村の内に日ぐらし金が作といへる所小宮山の陣屋ありければかくつらね侍る。小宮山は其所あづかり沙汰し給ふ御代官也。

右は、本来、享保十年三月の条に挙ぐべき資料が漏脱したものであるが、これによつて執斎と昌世が享保十三年の甲斐山梨郡田中村の「貞女栗女碑文」以前から交際があつたことが判明する。また執斎の歌によつても、享保十年の小金原での鹿狩における昌世の活躍がいかにか晴がましいものであつたかが如実に知られよう。南畝は、この一事に随分と心を止めたごとくで、先掲の「謙亭筆記抄書」にも当年の御鹿狩の記事を抄出する。

○明和二年乙酉（一七六五）正月廿五日、〔飛鳥井雅章卿聞書〕を書写する。

（七十七歳）
国会図書館蔵写本一冊の奥書に、

明和二年乙酉正月廿五日 小宮山昌世書

予今年七十七歳也

とある。鳥子の葵文繋ぎ刷表紙で、装訂は列帖装であるが、横半折した鳥子の料紙を数丁重ねて一括りとする、いわゆる折紙綴で、書冊の底部が袋状となる。判型は半紙判。ゆったりと丸味を帯びた昌世独得の書風で一面九行書き。本書の内容については、島原泰雄氏の論考「後水尾院とその周辺」⁽⁵³⁾に、寛文二年から同九年までの年紀を含む飛鳥井雅章の聞書であること、またいくつか「後水尾院仰和歌聞書」と同一の記述が見えることなどが紹介される。

○明和五年戊子（^{一七六八}_{八十歳}）、私撰集『霞関集』が編まれ、昌世の歌一首が入集する。

石野広通編『霞関集』は、寛政十一年七月に蹄溪藏版として出版されたが、その序文に、「みそとせあまり過にし春、明和いつ、のとしの比、かすみか関ちかき水みてる沢辺のおきな、かきよせしものありしに」⁽⁵⁴⁾云々とある通り、成立は明和五年のことであった。編者広通は冷泉門の幕臣で、御普請奉行、西丸御留守居などを歴任、また大部な和歌随筆『大沢随筆』を遺したことで知られる。本集は、堂上系の幕臣歌人を中心とした撰集であり、その規模からして宝暦、明和期最大の歌集と言つてよからう。とくに賀茂真淵を旗手とする古風派が相応の勢威を振いつつあつた時期の産物であるだけに、堂上系幕臣歌壇の根強さを証明するものと言える。もつともそれが、京都歌壇が霊元院の跡を受けて相当に活況を呈したことに付随するという一面も見落としてはなるまい。

『霞関集』巻末に付された「霞関集作者目録」には昌世について、

源昌世

冷泉門人、元中院門人といふ、御代官小宮山木工進、後小普請、野々宮定基卿に聞書世に流布す⁽⁵⁵⁾とあるが、その所詠はわずかに、

田家人稀

源昌世

賤の男か隣も遠くすむ里は人めまれなる小田の通路

(56) 一首が巻六雑歌に入集しただけである。「歌林一枝」も昌世について「そのよめる歌は多くもきかず」としてこの歌を挙げるにとどまり、かつ「このうたはさせる秀逸ともおもはれず」と評する。管見でも、他に昌世の和歌として知り得たのは、小宮山楓軒の『懷宝日札』三に「○間宮子節ヨリ贈ル、小宮山謙亭ノ短冊」として掲出の一首、

郭公

昌世

ホト、ギスコノ暁ノハツ声ヲ老ノ寢覺ニキ、モマカハヌ
(58) に過ぎない。

○明和六年己丑(一七六九)八月、下総国行徳領の塩浜の由来について上呈する。

向山源大夫著『蠹余一得』に掲出される「下総国行徳領塩浜由来書」なる資料に、次のようにある。(59)

行徳領塩浜之民、元来上総国五井^与申所ニ而往古々塩を焼覺へ家業之様ニ致候を、行徳領之もの近国之事故折節罷越見覺候而、当時十四ヶ村之内本行徳村、欠真間村、膝折田村三ヶ村之もの、内習候而、行徳領村附遠千潟砂場之内を見立、塩を少々ツ、焼習ひ、其節ハ渡世ニ仕候程之義ハ無之、自分宛用迄之塩を焼候処、近所之百姓共段々見習焼方を覚、他所^江も出し候得共、其節ハ塩年貢^与申ものも無之候(略)

有徳院様御尋有之様子承札申上候処(略)享保八卯年八月廿一日、上意之趣被申渡候

右者行徳領塩浜之儀御聞合ニ付、書留置候を写進申候、以上

明和六丑年八月 小宮山奎進

右は、行徳領の塩浜の由来について、元来、隣国の上総国五井で往古以来の家業としていた塩浜を、近郷である

行徳領三箇村の住民が見様見真似で覚え、徐々に生業となるに至った経緯を叙べたもの。おそらく、幕府が塩年貢の徴収を検討するために、享保八年、下総国の代官の一人であった昌世に問札すよう命じたものかと思われる。さらに明和六年になって又、勘定奉行廻りが必要が生じたために、当時の担当者である昌世に尋ねたのに対し、書留を写して進上したということであろうか。

○明和七年庚寅（一七七〇）牛込御門内御留守居町より、小石川水戸百間長屋に移住するか。

酒田市立光丘文庫本「謙亭筆記」の「加賀美遠清追加」には、「屋敷牛込御門内御留守居町當時構原左衛門屋敷、後移二小石川水戸百間長屋西諏訪町入口西角當時松平謙」とある。屋敷替の時期の詳細は不明であるが、東洋文庫蔵の明和八年の須原屋茂兵衛蔵版の「江戸大絵図」の、小石川水戸屋敷の西側、江戸川にかかる立（隆）慶橋畔から水戸屋敷寄り二軒目に「小宮山タクミ」とあるのは、すなわち昌世のことと、通称の「木工」を「タクミ」と読み誤ったものであろう。明和七年板の「江戸大絵図」は未見であるが、明和六年以前のそれには「小宮山タクミ」の表記はないので、明和七年の前後一二年の間に引越したと考えて大過あるまい。隆慶橋畔に居を定めたのは、「民蝶半記事伝」の奥に、「江戸川隆慶橋の辺の住ニて竜溪と号す」とあるのと合致する。

○明和八年辛卯（一七七七）以降、雑史「竜溪小説」成る。

内閣文庫本写本五冊によって本書の内容を示せば次の通りである。

△第一冊▽「平重衡於南部被誅、景義批判之事」「義経奥州へ落る、附安宅の関所を通る并難を通る、事」（以上藤九郎盛長私記抜書）「前田家濫觴附利家逸状」「利家逝去之事」「不受不施宗論の事」「香川光景忠義武勇」「伊香賀民部少輔事」（右者陰徳太平記抜書）「明智光秀登庸之書拔」「筒井順慶与羽柴秀吉一味之事」「黒田家の士串橋七兵衛竜を射殺候物語」「上州館林城主赤井父子三代の実記」「弁内侍もの語」

△第二冊▽「戸次石見守息女父の敵討」「近藤勘左衛門倅勘四郎報父之讐記事」「高山主馬家來報主讐事」

△第三冊▽「津田八弥妻夫の敵を討事」「赤松左兵衛記事」「伏見御城御謠初夜記事」

△第四冊▽「蒲生氏郷藥殺并井口内記報祖父記事」「ケイライアキマキ蜷子総角報情客助六讐紀事」「築地小田原町六十六部敵討」

△第五冊▽「久世三四郎以義氣庄林理助をかこふ事」「相撲取業平娘父の敵討の事」「明智日向守光秀の養女報父の讐志之事」「天正十年五月廿七日於愛宕山明智日向守光秀百句興行」「正徳四午年三月五日老女絵島御仕置被仰付候書面」「薙虎実録」「禁中并公家諸法度」

以上

右の通り、本書が収めるところは、源平の兵乱以降、南北朝から戦国期さらには江戸期の武辺譚を中心としており、昌世の真骨頂を感じさせるものがある。第一冊の前半に所収の各話が「盛長私記」および「陰徳太平記」からの抜書であることを断るほかは、出拠を明記しない。いずれ何らかの典拠があったはずで、口碑など多いのかも知れず、昌世は日頃から武辺譚の情報蒐集につとめていたに違いない。全体として、敵討ちの話が多いことは一見して明らかであるが、当時、武家の綱紀肅正のために敵討を奨励した幕府の政策と軌を一にするものと言えようか。江戸種としては、歌舞伎にも採られて著名な、延宝頃の揚巻助六情死事件や元文五年に起った築地小田原町六十六部敵討事件を収め、また敵討ではないが、正徳四年の絵島密通事件など、世間の耳目を驚かした際物で、実録小説が好んで取上げる話題をも含む。本書の成立は詳らかでないが、第五冊に所収の「薙虎実録」と称する一話に、対馬藩が朝鮮の慶尚道草梁に置いた和館なる屋敷について、「常に此和館に對州の番頭を遣して押とす、彼名を館守と号す、時に明和八年在職の館守を田島某平長恭といふ」と記すので、明和八年を遡ることとはない。またもとより、書名の「竜溪小説」が、昌世の居処である隆慶橋畔に因むものであることは言うまで

もあるまい。

さて、通行の『竜溪小説』には含まれないが、同じ書名を冠しつつ、別に独立して伝えられるのが、『民蝶半記事伝』と称する一資料である。本資料は、英一蝶等の配流事件を述べながら徳川綱吉周辺の御歴々が実名人りで登場するため、名を匿して極秘に出回ったものに相違ないが、諸資料こぞって著者を昌世とする。題名は、同時に遠島に処せられた大仏師民部、多賀朝湖（一蝶）、村田半兵衛の三人に由来するが、話は民部の懺悔話という体裁を採っており、末尾に「右之記民部か直の物語を書付をかれし人なり、写して稗間の筆を俟」とあるように、民部の直話をそのまま記したことを断る。そもそも一蝶の配流については、異説紛々として、山東京伝の『近世奇跡考』にも取り上げられた、綱吉と寵女お伝の方に見立てた朝妻船の図を描いたことが忌諱に触れたとする浮説もまことしやかに行れたが、諸説の源流をなすのが本資料で、高名な一蝶をさし置き、無名の民部を主役とするあたりにかえって信憑性を感じさせるものがある。小林忠氏も「英一蝶伝―その配流を中心として―」なる論考で、本資料を摘録した山東京山の『一蝶流謫考』⁽⁶³⁾について詳細な検討を加えられ、「記された内容を吟味すると登場人物の矛盾はなく、叙述も詳細にわたって、しかも洪滞しない。かりに宝暦年間の作とすれば一蝶歿後さほど経ぬ頃の著述（或は書写）であり、『筠庭雜録』にいうように「妄誕」の説として一概にしりぞけ難い内容をもつ資料と考えられる」と述べ、⁽⁶⁴⁾ほぼその内容に即して一蝶伝の配流を構成された。

一蝶は、多賀氏のち英氏、通称助之進、名信香、字君受、別号は朝湖（蝶古とも）、北窓翁などで俳号は暁雲、花街の通り名を和応と称し、諸家に取入り、幫間を事とした。享保九年正月十三日没、七十三歳。狩野安信に師事したが、菱川師宣に私淑、市井の風俗画をよくして人気を博し、蕉門の其角と親交がある。元禄十一年に伊豆三宅島に配流されるが、宝永六年將軍の代替の特赦により江戸に復帰した。その容貌については、『民蝶半記事

伝」に、「色白く目大きくすましてもの言静なる生付、絵は名人といふ、生得欲深くして咄しておもしろからぬ男なり」とある。

披見した国会図書館蔵本は奥に「右は成島司直先生より借得て段々写し置るを天保九⁽⁶⁵⁾年文月盆中に写し置もの也 藤木厚通」とある。いま当該本『民蝶半記事伝』によって、話の概略を見ておくことにする。すなわち民部は、弟子の伊兵衛が金設けを企み、日光御普請の徳用を押領したため、浅草並木町の茶屋でさし殺し、自身も何者かに襲われたように見せかけ、町奉行所の検使を受ける。詮義の上、江戸徘徊無用を仰せ付けられ、本所の長屋に三年隠れ住み、のち『稽古百人男』という題名で、たとえば「昔なからの山桜^(哉脱) 伊勢十兵衛^{松平さつまの}留守居^{守居}」といった類のものを思い付き、絵師和翁と手蹟自慢の医者をつたづらかして書かしめる。それが段々世上の評判となつて、目を留めた阿部豊後守が町奉行所に吟味させ、絵師と医者が打ち首となるが、民部は難を免れた。さらにその頃、朝湖と共に幫間として明暮吉原通いのお供をしていた、井伊伯耆守が家督の時に十三万両の譲り金があったことを揶揄して、「月見に月見」という歌を作つて、その口の部を、平家語りの名人近藤某に無理やり平家琵琶に語らせ、歌の部から市川検校に三味線で弾かせたところ、やかて家老用人の耳に入り、いずれも出入無用となつたと言う。その後、本庄安芸守に声を掛けられ、吉原の案内を仰せ付かるが、安芸守が真に傾城の名に値する遊女を所望したため、大きな疵の有る捨り物ながら、氣質、容顔ともに備えた茗荷屋の大蔵のことを話した。さらに安芸守はその疵の訳を聞きたがつたので、大蔵が戸沢与兵衛なる幫間と契り、心中立てに指を切り与えたが、与兵衛の久しい馴染の越前屋の三笠と大蔵が白昼大騒動を演じた結果、与兵衛は元の鞘に納まったのに対し、大蔵はその氣勢者の氣質も災いして捨り者同然となつた一部始終を話す。それを聞いた安芸守は、その器量に感じ入り、大蔵を揚詣^{あげき}でして茗荷屋に日参したうえ、請出すことを思案するが、かつて桂昌院の奥女中のち安芸守

の囲い妻でもあった民部妻の反対に会う。そのうち安芸守父の本庄因幡守が大目付小田切土佐守に、息子の廓通いを止めさせるために巖屋の遊女を請出させたいと漏らした話を立聞きした安芸守は、民部と相謀つて大蔵を請出す。その日、民部は町奉行北条安房守に呼出されるが、翌日出頭すると、朝湖と半兵衛が居合わせ、三人一緒に白洲での詮義があり、「馬の物言たり」という事を云出したと断ぜられ、入牢のち遠島を仰付けられる。ただし内実は、三人の三宅島での懷古談に、

三宅島に三人寄合咄けるは、大蔵事は請出しても不受出とも三人の者のかれ有へからず、元より我等身持公義へしれ、大名へ出入そ、のかし、夫を渡世の様に致し、吉原へれきく様方を伴ひ申様、沙汰のある最中、本庄殿茗荷やの大蔵、六角越前守殿は菱屋の小はた、此大鼓持は蝶古、半兵衛也、其外五七千石の御旗本衆、貳百両、三百両にて請出し、年明をされて妾にも被致候衆、あそここ、に右三人も出入す、半兵衛は本庄殿江只一度目見^江はしたるに、蝶古、民部と一所に遠島する事不幸也、内実は北条安房守殿へ、三ノ丸様より御内意あり、右三人之者共大名へ出入以の外、人物不宜者共也、吟味致し遠島申付候様に被思召との御老中方へ被仰入

とあるごとく、三人が本庄安芸守や六角越前守などの大名や旗本衆に出入りし、吉原へ案内して遊女の身請けを手引きするなど行為を見咎めた將軍綱吉の生母桂昌院（三の丸様）が北条安房守に働きかけて厳罰に処したといふところにある。小林忠氏が指摘されるように、本庄安芸守宗資と六角越前守広治は、いずれも桂昌院の親類に当たっており、「先に本庄宗資、いま六角広治と、二人の縁者を墮落させた一蝶らに対する桂昌院の怒りは、想像に余りあるものがある」⁽⁶⁶⁾といふことであろう。

さて、右の『民蝶半記事伝』に見える二件の筆禍について、まず『稽古百人男』は、宮武外骨の『筆禍史』に

所出の「御仕置裁許帳」の元禄四年十月の記事に、「人の噂を色々書立百人男と記し」た罪などにより、山口宗倫が死罪となったほか、四名が連座するなかに「本所三文字屋々敷又市店 桑原和翁」の名が見える。宮武氏は、この和翁を菱川和翁さらに一蝶に同定するがいかがであらうか。もし菱川和応なる署名を用いた実在の絵師が一蝶とは別人であることが明らかになれば、小林氏も推定するように、この和応こそが『稽古百人男』に連座した絵師と考えられることになろう。ただし『筆禍史』掲出の資料によれば、和翁は打ち首ではなく、日本橋より五里四方追放の刑で生き延びたはずである。

次に、「馬の物言たり」の方は、やはり『筆禍史』に「鹿の巻筆」として紹介される、かなり知られた一件であるが、今は『民蝶半記事伝』の頭書に見えるところを左に掲げて、参考に供するに止めたい。

一蝶等の流刑は、同人等馬の物いふ牛の物いふと申書を戯作せしに依り流されたり、馬の物いふは、其時將軍綱吉の事なり、先に右馬頭と申されたり、牛の物いふとは、其時の寵臣柳沢殿の事なり、先に牛之助と申により夫を諷して斯く名付もの也、今其本を世話せし先の芝神明前の書肆岡田屋は所払ひとなり、麻布一本松へ転居せしといふ、此話は薩藩の出入鑑定家本屋平蔵の話なり、一説に備ふ

しかし、通説では、「馬の物言いたり」と言う落し咄しを基に、鹿野武左衛門が古山師重の挿画と共に著したのが『鹿の巻筆』で、それに基づき附会の流説をなして、金銀を欺取したのが神田須田町の八百屋総右衛門および浪人筑紫園右衛門である。いずれも一蝶らの流刑の前後に刑に処されており、頭書の一説はいつかな信用することとはできないが、綱吉と吉保に引懸けた解釈は一考を要すると思われるがいかがであらう。

○安永三年甲午（一七七四）三月二十日没。

昌世の没時については、『寛政重修諸家譜』には記載がないが、『断家譜』に、

安永二年癸巳閏三月二十日没、葬長慶寺、法名謙徳院昌亨栄世

⁽⁶⁸⁾とあり、また酒田光丘文庫本『謙亭筆記』の「加賀美遠清追加」にも、

安永三年^{甲午}三月廿日卒、歳八十六、葬深川六間堀森下町蟠竜山長慶寺、法名謙徳院殿昌亨栄世居士

とあるが、いずれが正説とも決しえない。長慶寺の縁起は、『御府内備考』続編に「開闢起立之義者寛永七庚午年草創二而、其比当境二名を蟠竜松と云大松有」⁽⁶⁹⁾云々とあるように、寛永七年開創の曹洞宗の禅刹であるが、度重なる罹災によって、他の建造物と共に昌世の墓石も烏有に帰し、現存しない。同寺でほかに焼失、損壊したものの中に、杉風が元禄七年十月に築いた「芭蕉翁発句塚」および明和九年十月にその由来を記した鵜殿士寧撰文沢田東江書「芭蕉翁句塚碑記^並銘」があり、後者は法帖としても行われたが、建碑は昌世が没する一年半ほど前のことであった。

注

- (1) 『近世儒家文集集成』第六卷（ベリかん社、昭和六十一年）二六六、七頁。
- (2) 同右二六七、八頁。
- (3) 同右一二二、三頁。
- (4) 『日本随筆大成』第一期第十四卷（吉川弘文館、昭和五十年）所収、二二三頁。
- (5) 同右一六八頁。ほかに『文会雜記』の記事として、「神祖已来、キツトシタル制度ト云モノナシ。三奉行シテ天下ヲキリモリスルコト、アマリソマツノコト也。小宮山奎之進ノ評判ニ御当家ノ政ハ庄屋シタテ也。大庄屋、名主、年寄トテ三職ナリ、ト君修ノ話ナリ。」とある。いかにも地方巧者の昌世ならではの至言と言える。同一八〇頁。
- (6) 『甲斐志料集成』十一（甲斐志料刊行会、昭和九年）四頁。
- (7) 『断家譜』第二（統群書類従完成会、昭和四十三年）二七六頁。
- (8) 『新訂寛政重修諸家譜』第一卷（統群書類従完成会、昭和三十九年）二八二頁。
- (9) 同右八七頁。
- (10) 請求番号二二一・五六二。著者不明、明治前期の写本四冊本である。はじめに「河津祐篤先生及其子祐之祐章清原葛子等の墓慶安寺に在り、誌銘あり、左に録す」とある。
- (11) 『国学史上の人々』（昭和五十四年、吉川弘文館）所収、三五四頁。
- (12) 『森銑三著作集』第七卷（昭和四十六年、中央公論社）所収。
- (13) 請求番号九一一・二六・四二七・二。
- (14) 『国学史上の人々』三五二・三頁。
- (15) 内閣文庫蔵、一五八・四九五、写一冊。昌平坂学問所本。
- (16) 『日本儒林叢書』第三卷（鳳出版、昭和五十三年複製）七六・七八頁。
- (17) 稿本一冊。大正十五年例言。名越時正氏の御好意によつて閲読の機会を与えられたが、活字翻刻が切望される資料である。
- (18) 『日本儒林叢書』第三卷一頁。
- (19) 『日本随筆大成』第一期第十四卷二九頁。

- (20) 杉田雨人著『長久保赤水』（昭和九年、水戸杉田恭助）三七、八頁。
- (21) 『掃苔』第九卷四号（昭和十五年四月）掲載。
- (22) 『本居宣長全集』別卷三（平成五年、筑摩書房）三九八頁。
- (23) 荷見守文校訂『此君堂文庫^{付詩集}』（立原善重発行、昭和三十四年四月）六四頁。
- (24) 『西山梨郡志』（昭和四十九年複製、名著出版）一〇八二頁。
- (25) 同右一〇八三頁。
- (26) 『甲斐国社記・寺記』第一卷（山梨県立図書館、昭和四十二年）三三四頁。
- (27) 『甲斐叢書』第二卷（同刊行会、昭和九年）所収、三二三頁。
- (28) 『西山梨郡志』一〇八四頁。
- (29) 『甲斐志料集成』三（昭和八年、大和屋書店）所収、二〇二頁。
- (30) 『西山梨郡志』一〇八三頁。
- (31) 注（29）参照。
- (32) 『西山梨郡志』一〇八五頁。
- (33) 『新訂寛政重修諸家譜』第十七（昭和四十年）三八〇頁。
- (34) 『江戸本屋出版記録』上巻（ゆまに書房、昭和五十五年）二八二頁。
- (35) 請求番号〇九〇・一二・一―三。
- (36) 『日本随筆大成』第一期第十四卷一六八頁。
- (37) 請求記号は狩四・一四三四〇・一。
- (38) 『新訂寛政重修諸家譜』第二十二（昭和四十一年）三八二頁。
- (39) 注（7）参照。
- (40) 同右。
- (41) 『新訂寛政重修諸家譜』第十七（昭和四十年）四一六頁。
- (42) 注（38）参照。
- (43) 『江戸本屋出版記録』上巻、三六八頁。

(44) 『近世和歌文学誌』第一集（昭和五十九年五月）所収。

(45) 請求記号は一二・二九五。

(46) 平成二年三月号所載。

(47) 『新訂寛政重修諸家譜』第二（昭和三十九年）一九九頁。

(48) 『江戸文藝攷』（岩波書店、昭和六十三年）所収「山手馬鹿人の問題」五四、五頁。

(49) 中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話』三（平凡社東洋文庫、昭和五十二年）一四四、五頁。

(50) 『大田南畝全集』第十三卷（岩波書店、昭和六十二年）三三四頁。

(51) 同右第十四卷（昭和六十二年）三九八頁。

(52) 請求記号九一一・一〇四・A九五四二aw。

(53) 『近世堂上和歌論集』（平成元年、明治書院）五九頁の注一三参照。

(54) 松野陽一編『霞関集』（古典文庫第四三〇冊、昭和五十七年）六頁。

(55) 同右二四〇、一頁。

(56) 同右一六〇頁。

(57) 『日本歌学大系』第九卷（風間書房、昭和四十七年）二〇六頁。

(58) 『随筆百花苑』第三卷（中央公論社、昭和五十五年）五四頁。

(59) 『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第三卷（汲古書院、昭和五十六年）二〇九―二二二頁。

(60) 請求番号一二三、写本一冊。

(61) 刊一舗。題簽「分間江戸大絵図 完」。刊記「明和八^辛 毎月改 金丸彦五郎影直／書林^{江戸日本橋南老町目} 須原屋茂兵衛蔵版」。

(62) 請求番号二一一・五一（三四三五七）。昌平坂学問所本。

(63) 国会図書館蔵、自筆写一冊、請求記号、午・一二。奥書に「天保八年丁酉之秋八月七日／筆を京橋の山東庵に採る／涼仙老樵」とあり、巻頭に「一日茶友松濤館主人より八時に御庭之者支配高橋与太夫殿／竜溪小説／写本」といふを借読せしに一蝶と同じく謫せられたる仏師民部が懺悔話に聞きたりとして、第一に民部が旧悪の始終および一蝶と罪を同じうして流罪に所せられし事どもを記して甚だ詳也、文多ければ今こゝに其要を摘し記す」とある。ただし、『民蝶半記事伝』より一蝶に同情的な筆勢であることは、要注意である。

- (64) 『国華』（朝日新聞社）九二〇号（昭和四十三年十一月）掲載、一一頁。
- (65) 請求番号八五九・八一。美濃判写一冊。巻首題は「竜溪小説 民蝶半記事伝」であるが、整理書名は「竜溪小説」、題簽「民蝶半記」。「帷子の衿にしるせし応斎か詞」「英一蝶伝并系図」「朝清水記」などを合綴。また慶応大学図書館蔵の一本は、請求番号二一五・六六一・一、半紙判写一冊、題簽「民蝶半小伝」、奥書は「文政七年秋九月三日夜費油一時半早筆」。さらに見返しに「竜溪小説は小宮山昌世の著述にして、久世三四郎庄林理介をかこふの義氣、相撲取業平の娘父の仇を討し始末、明智の養女盛姫の事実、高藤何かし撫子の紋付る起原など、いとくわしく記せしもの也、頓に謄写せんと筆をとりつれと、いさ、かさしつかゑ□の侍りて附録小伝のみ写して蔵書の尾に附す／癸未八月 抱節主人／此詞書清水氏之蔵書有之ヲ写置」とあり、本書がもと『竜溪小説』第五冊の附録であつたことが明らかとなる。
- (66) 『国華』九二〇号二三頁。
- (67) 宮武外骨著『筆禍史』（成光館出版部、昭和四年改訂増補五版）二八頁。
- (68) 注（7）参照。
- (69) 『御府内寺社備考（御府内備考続篇）』第五卷（名著出版、昭和六十二年）三一五頁。